依存欲求尺度の作成，および，信頼性と妥当性の検討

Construction of a Scale for Dependency needs and its Reliability and Validity

田中　優*
Masashi Tanaka

〈キーワード〉

互恵的相互依存，依存欲求尺度，信頼性，妥当性
reciprocal interdependency, Scale for Dependency needs, reliability, validity

〈要　約〉

本研究では，研究1において，互恵的対人関係における双方向のやりとりのうち，「他者からの道具的な支援，あるいは，精神的な支援を求める欲求」と操作的に定義された依存欲求を測定するための依存欲求尺度が作成された。そのために，まず，48項目からなる依存欲求候補尺度を作成し，大学生186名にこれを実施した。内的整合性の原理による項目分析，因子分析を行い，20項目からなる依存欲求尺度が作成された。さらに，尺度の信頼性と妥当性を検討するために，1998年と2000年に，中学生，高校生，大学生，合わせて1707名の被調査者に対して，20項目の依存欲求尺度による調査が実施された。異なる2時点での，異なる被調査者への調査において，そのいずれにおいても非常に高い内的整合性が確認されたことから，尺度の信頼性が確認された。また，98年調査と00年調査において，いずれも，情緒的支援因子，相談・コミュニケーション因子，指導・アドバイス因子，そして，道具的支援因子と解釈できる，同様の因子が，それぞれ導出されたことから，依存欲求尺度の因子的妥当性が確認された。さらに，両調査における中学，高校，大学のすべての学年において，女子の方が男子よりも，より高い依存欲求の強度得点を示した。すなわち，「依存欲求尺度が妥当性を有するならば，女子の方が男子よりも欲求の強度はより強いだろう」という仮説が検証されたことにより，依存欲求尺度の構成概念妥当性が確認された。

* 大妻女子大学　人間関係学部　人間関係学科　社会心理学専攻

問題

対人関係における双方向のやりとりについての研究

ある程度継続的な対人関係においては，依存「する側」と「される側」との双方向のやりとりがあり，現実的には，その関係が交互に入れ変わることが多い。社会心理学における援助研究やソーシャル・サポート研究において，これまでは，どちらかといえば静態的・一時的な研究が行われてきた。しかし近年，それらに加え，動態的・継時的な，ある程度継続する対人関係における援助やサポートを扱う研究が行われるようになってきた。

まず最初に，援助行動の研究についてみてみると，それまでの援助を与える側の研究に加えて，援助を依頼する側や援助を受ける側の立場から，援助過程をとらえようという研究が増えてきている。たとえば，相川（1987）は，被援助者の直面する問題が重要かどうか，自分に問題解決能力があるかどうか，適切な援助者がいるかどうか，そして，援助を要請する方略はあるかどうかの4つの主要な判断から構成される援助要請の意思決定モデルを提唱している。また，西川（1997）は，援助要請行動は，援助者と被援助者との関係成立過程の初めの段階で生起する行動であり，継続的な援助関係を理解するためには，まず援助の要請とそれへの反応を取りあげることが重要であるとして，主婦が親友や隣人との間で交わす日常的な援助行動の特徴を，援助要請者と被援助要請者の双方の視点から明らかにしている。

つぎに，ソーシャル・サポートの研究では，飯田（2000）は，1980年代から20年の間に行われた高齢者に関するソーシャル・サポート研究を概観し，これまで明らかになったことと研究の流れについて，以下の4点を指摘している。まず，1つめは，ソーシャル・ネットワークとは個人をとりまく重要な他者からなり，それが個人の心身の健康維持・増進にかかせないことである。2つめは，ソーシャル・サポートの種類が多様なことである。彼女は，サポートの種類について，研究者によりその分け方は異なるが，おおむね，情緒的サポートと手段的サポートとに二分されるとしている。3つめは，ソーシャル・ネットワークを構成する成員とその機能が検討され，家族（配偶者や子ども）と家族以外の人々（親戚，友人，近隣，施設の職員）に分けて，それぞれがいかなるサポートを提供しているのか，あるいは，いずれがサポーターとして有効であるかなどについての研究がなされていること。そして，4つめに，ソーシャル・サポートでは，サポートの受け手がときには送り手にもなること，つまり，サポートは互いに交換されているという事実に根ざした研究がでてきていることである。ソーシャル・サポート関係の互恵性についての研究の多くは，社会的交換理論の衡平理論（equity theory）によるものである。衡平理論からの説明では，自分の投入（input）と成果（outcome）の比率である交換率が問題となる。すなわち，自分の交換率が他者の側のそれを上回っていると個人が認知する場合，過剰利得状態となり心理的負債感を感じるのである。また，自分の交換率が他者のそれを下回っている場合は，過小利得状態であり負担感が高まるのである。これらに対して，自他の交換率に均衡が取れている状態を，互恵的（均衡）状態といい，互恵的状態は，過剰利得状態や過小利得状態よりも，心理的適応にとってはよいという知見が報告されている（Antonucci & Jackson, 1990；周・深田，1996；福岡，1999）。

互恵的相互依存関係

高橋（1990）は，愛着の研究において，乳幼児が養育者から「与えられる」だけの一方的な関係であったものが，高齢者においては，「与えられ」，同時に，「与える」という双方向の関係性に関心を向けることの重要性を指摘している。ジョンソン（Johnson, 1993）は，1980年代後半までの欧米の心理学，社会科学，臨床医学の文献にみられる「依存」という概念について概観し，最近では，依存の相互行為的で互恵的な，そして社会象徴的な性質を表すのに，「相互依存（interdependency）」という語が用いられるようになっていると述べている。ここでいう「相互依存」とは，互

いに相手をさまざまな形で必要とし，利用しあっている結びつきにみられる，互恵的行為の相互作用としての性質を強調するものである。コーラーとガイアー（Cohler, B. J. & Geyer, S., 1982）は，自律と自立（autonomy and independence）が，成人の対人関係において理想の形態であるとされているけれども，家族や現実の対人関係においては，相互依存の形態はより現実的な特徴であると述べている。また，ガリアン（Gurian, 1984）は，依存を相互的なものとみている。つまり，依存する側はある反応を得ることを求め期待しているが，他方，満足させる側もそのような反応をするつもりでおり，そのような相互行為は義務的なものである。また，依存する者は，援助を求め恩を返すことを期待されており，この義務の輪のなかに入り損なうと，非難をあびることから追放にいたる一連の反応を引き起こしかねないとしている。ジョンソン（Johnson, 1993）は，依存と自立（＝非依存）という理念的な二分法は，現実を過った解釈に導くことを強調しながら，相互依存という概念を用いることにより，生涯を通じて人間が実際にお互い寄りかかり支えあう複雑なありさまを思い描くことが可能になるとしている。

筆者は，依存と支援の双方向のやりとりからなる互恵的相互依存関係に注目し，個人がいだく依存欲求と支援欲求の様相から互恵的相互依存関係を特徴づけることにより，ある程度継続する対人関係を説明することができるのではないかと考えている。なお，本研究では，「他者からの道具的な支援，あるいは，精神的な支援を求める欲求」を依存欲求，また，「他者への道具的な支援，あるいは，精神的な支援を提供することを望む欲求」を支援欲求とそれぞれ定義する。

全体の目的

本報告では，互恵的相互依存関係における依存と支援の双方向のやりとりのうち，個人の依存欲求を測定するための依存欲求尺度の作成（研究1），および，尺度の信頼性と妥当性の検討（研究2）を目的とする。

研究1：依存欲求尺度の作成

目的

研究1では，筆者の依存欲求についての定義に基づいた依存欲求尺度を作成することを目的とした。

方法

項目の収集

依存欲求項目を収集するために，「他者にたよりたいと思う気持ちについて，思いつくだけ書いてください」という自由記述の予備調査を行った。調査対象者は，女子短期大学生120名であった。調査時期は，1998年4月であった。つぎに，依存，愛着，ソーシャルサポート，援助行動などの研究（高橋，1968；高木，1987；嶋，1991；福岡，1997など）を参考にして，自由記述の予備調査に含まれなかった項目を新たに加え，計80の項目を作成した（付録1）。この80項目から，内容的に類似するものや，わかりにくい表現のものを整理し，最終的に48の候補項目を作成した。

項目の検討

依存欲求尺度を作成するために，関西地方にある私立大学の大学生186名（男子107名，女子79）を対象とした調査が行われた。調査時期は，1998年9月であった。調査は，講義の終わりに，「大学生の対人関係」という名目で実施され，調査は無記名であり，結果は研究以外の目的には使用されないことが説明された。被調査者には，日常生活に有意味な関連を持つと想定される対象，すなわち，母親，父親，同性の親友，そして，異性の親友の4対象について，前述の手続きにより作成された48の候補項目に表わされた内容が，自分にどの程度あてはまるのかについて，“あてはまる”，“少しあてはまる”，“どちらでもない”，“あまりあてはまらない”，“あてはまらない”の5つの選択肢から1つを評定することが求められた。

結果と考察

調査で得られた回答に対して，“あてはまる”から“あてはまらない”の順に，5，4，3，2，1点を与え得点化した。

まず，父親，母親，親友，恋人の4対象を込みにしたデータについて，内的整合性の原理による項目分析を行った。内的整合性を低めていると思われる項目を順次削除し，段階的に尺度の信頼性係数（Cronbachのα係数）を算出したところ，48項目での信頼性係数は.959，36項目では.965，31項目では.966であった。内的整合性を低めていた17項目の内容をみてみると，「Aには，私の身の回りの世話をしてほしい。」，「Aには，私ができないことを，代わりにやってほしい。」，「Aには，難しい仕事をするとき，手伝ってほしい。」，「Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい。」などの道具的支援の内容を表すものであった。これら17項目を削除し，残った31項目について，因子分析（主成分解・バリマックス法）による因子構造の解明を行ったところ，固有値が1.0以上を1つの目安として，加えて，十分なる説明割合を得ることができ，スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮して4因子が導出された。そこで，これら4因子において，単一の因子にのみ.45以上で負荷している項目（内容が類似しているものは因子負荷のより高いもの）を選出することとした。この基準に従い，第1因子から6項目，第2因子から4項目，第3因子から3項目，第4因子から3項目の計16項目を選出した。これらに，項目分析で削除された道具的支援を表す17項目のうちの4項目を加えて，20項目の依存欲求尺度を作成した。

20項目からなる依存欲求尺度の因子構造を確認するために，因子分析（主成分解・バリマックス法）を行ったところ，固有値1.00以上で4因子が導出された（Table 1）。導出された4因子はそれ

Table 1：依存欲求尺度の因子分析結果（バリマックス回転）

	精神的支え	相談・コミュニケーション	指導・アドバイス	道具的支援
精神的支え				
Aには，私のことを考えていてほしい。	.782	.140	.322	.110
Aには，私にとって，思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい。	.777	.286	.205	−.062
Aには，私が元気でいるかどうか気にかけてほしい。	.733	.179	.272	.154
Aには，私の身の回りの世話をしてほしい。	.656	.135	−.288	.190
Aには，私の心の支えでいてほしい。	.635	.384	.365	.057
Aには，私のわがままを受け入れてほしい。	.521	.217	.021	.491
Aには，悪い知らせや悲しい知らせを受け取るとき，一緒にいてほしい。	.504	.296	.300	.284
相談・コミュニケーション				
Aには，私のぐちを聞いてほしい。	.130	.787	.001	.268
Aには，私の話し相手になってほしい。	.279	.761	.247	.112
Aには，私の悩みを相談したい。	.216	.713	.420	.128
Aには，何でも話したい。	.237	.701	.404	.075
Aには，うれしいことや楽しいことを，まず報告したい。	.427	.638	.360	.017
Aには，喜びや悲しみを，共に感じてほしい。	.435	.553	.432	.136
指導・アドバイス				
Aには，重要な決心をするときは，意見を聞きたい。	.168	.323	.673	.160
Aには，私の知らないことを，教えてほしい。	.147	.193	.662	.321
Aには，私の間違いや欠点を指摘してほしい。	.200	.269	.645	.129
道具的支援				
Aには，私ができないことを，代わりにやってほしい。	.051	−.021	.133	.794
Aには，難しい仕事をするとき，手伝ってほしい。	−.024	.112	.379	.756
Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい。	.199	.397	−.075	.649
Aには，難しい仕事をするとき，そばにいてほしい。	.328	.149	.356	.555
固有値	8.73	1.82	1.52	1.04
寄与率(%)	43.66	9.12	7.60	5.22

ぞれ以下のとおりである。

まず，第1因子に高い負荷を持つ項目は，「Aには，私のことを考えていてほしい。」，「Aには，私にとって，思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい。」，「Aには，私が元気でいるかどうか気にかけてほしい。」などの項目であり，「精神的支え」因子と命名した。

第2因子に高い負荷を持つ項目は，「Aには，私のぐちを聞いてほしい。」，「Aには，私の話し相手になってほしい。」，「Aには，私の悩みを相談したい。」，「Aには，何でも話したい。」などの項目であり，「相談・コミュニケーション」因子と命名した。

第3因子に高い負荷を持つ項目は，「Aには，重要な決心をするときは，意見を聞きたい。」，「Aには，私の知らないことを，教えてほしい。」，「Aには，私の間違いや欠点を指摘してほしい。」の項目であり，「指導・アドバイス」因子と命名した。

そして，第4因子に高い負荷を持つ項目は，「Aには，私ができないことを，代わりにやってほしい。」，「Aには，難しい仕事をするとき，手伝ってほしい。」，「Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい。」，「Aには，難しい仕事をするとき，そばにいてほしい。」であり，「道具的支援」因子と命名した。

研究2：依存欲求尺度の信頼性と妥当性

目的

研究2では，研究1で作成した依存欲求尺度の信頼性と妥当性を検討する。そのために，1998年と2000年に，それぞれ異なる調査対象者に，依存欲求尺度を用いた調査を実施した。信頼性については，これら調査における内的整合性をCronbachのα係数を算出することにより検討する。また，妥当性については，構成概念妥当性を2つの方法で検討する。1つは，異なる2時点の異なる被調査者における因子構造の比較から，因子的妥当性を検討するものである。もう1つの方法は，男女における依存欲求の強度差についての以下の仮説を検証する。つまり，「依存欲求尺度が妥当性を有するならば，女子の方が男子よりも欲求の強度はより強いだろう」という仮説である。これまで，依存性の性差については，女子の方が男子よりも有意に欲求の強度が高いことが報告されている（たとえば，辻，1969；加藤，1982；関，1982；田中・高木，1997など）。

方法

1998年調査

1998年10月に実施した調査（以下，98年調査と記す）の調査対象者は，関西地区の私立中学校の1年生と2年生202名（男子82名，女子120名），関西地区の私立高等学校の1年生と2年生214名（男子95名，女子119名），および，関西地区の私立大学の1年生から4年生186名（男子107名，女子79名）であった。

2000年調査

2000年1月から5月にかけて実施した調査（以下，00年調査と記す）の調査対象者は，関西地区の公立中学校の1年から3年生411名（男子200名，女子211名），中国地方の公立高等学校の1年生と2年生278名（男子165名，女子113名），そして，関西地区の大学生227名（男子125名，女子102名）と短期大学生110名（男子7名，女子103名）および，関東地区の女子大学生79名の計416名（男子132名，女子284名）であった。

手続き

98年調査，00年調査ともに，中学，高校，大学での調査は，いずれも，授業の終わりに「青年期の対人関係」という名目でそれぞれ実施された。調査は無記名であり，結果は研究以外の目的には使用されないことが説明された。被調査者には，日常生活に有意味な関連を持つと想定される対象，すなわち，母親，父親，同性の親友（以下，親友と記す），そして，異性の親友（以下，恋人と記す）の4対象について，依存欲求尺度20項目に表された内容が，自分にどの程度あてはまるのかについて，評定することが求められた。評定の選択肢は，“あてはまる”，“少しあてはまる”，“どちらでもない”，“あまりあてはまらない”，

“あてはまらない”の5件法であった。

結果と考察

依存欲求尺度の信頼性

評定された5件法に対して，“あてはまる”から“あてはまらない”の順に，5，4，3，2，1点を与えた。中学生，高校生，大学生の各発達段階別，および，全発達段階で，また男女別，および，男女込みで，それぞれCronbachのα係数を算出したところ，Table 2のように，いずれも.90以上の値を示し，尺度の高い信頼性が確認された。

Table 2：
98年調査と00年調査における依存欲求尺度の信頼性（発達段階，および，男女別）

		1998年調査	2000年調査
中学	男女込み	.930	.921
	男子	.913	.907
	女子	.938	.929
高校	男女込み	.926	.924
	男子	.918	.916
	女子	.924	.924
大学	男女込み	.928	.928
	男子	.920	.918
	女子	.929	.928
全体	男女込み	.928	.926
	男子	.917	.914
	女子	.932	.930

（数値は，クロンバックのα係数）

依存欲求尺度の構成概念妥当性：因子的妥当性

98年調査における中学生，高校生，大学生の各発達段階，および，対象を込みにしたデータについて，因子分析（主成分解・バリマックス法）を男女別で，それぞれ実施したところ，男女でほぼ同様の結果を得た。そこで，男女を込みにした同様の因子分析を行ったところ，固有値が1.0以上を1つの目安として，加えて，十分なる説明割合を得ることができ，スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮して4因子が導出された。導出された4因子はそれぞれ以下のとおりである（Table 3）。

第1因子は「Aには，私の悩みを相談した

Table 3：1998年調査における依存欲求尺度の因子分析結果（バリマックス回転）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
①Aには，私の話相手になってほしい。	.767	.237	.265	.045
⑦Aには，私のぐちを聞いてほしい。	.751	.153	.042	.267
⑮Aには，何でも話したい。	.736	.210	.323	.073
⑩Aには，私の悩みを相談したい。	.718	.227	.354	.136
⑤Aには，うれしいことや楽しいことを，まず報告したい。	.671	.394	.269	.064
⑫Aには，喜びや悲しみを，共に感じてほしい。	.528	.459	.425	.117
⑥Aには，私のことを考えていてほしい。	.239	.765	.290	.081
⑧Aには，私が元気でいるかどうか気にかけてほしい。	.186	.751	.256	.188
②Aには，思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい。	.422	.654	.254	−.035
⑬Aには，私の心の支えでいてほしい。	.435	.618	.397	.082
⑪Aには，私のわがままを受け入れてほしい。	.159	.542	.017	.449
⑯Aには，私の身の回りの世話をしてほしい。	.092	.520	−.282	.481
⑳Aには，悪い知らせや悲しい知らせを受け取るとき，一緒にいてほしい。	.337	.481	.341	.265
⑭Aには，私の間違いや欠点を指摘してほしい。	.272	.220	.680	.075
⑨Aには，私の知らないことを教えてほしい。	.260	.141	.626	.269
③Aには，重要な決心をするときは，意見を聞きたい。	.335	.261	.625	.123
④Aには，難しい仕事をするとき，そばにいてほしい。	.262	.329	.437	.423
⑰Aには，私ができないことを，代わりにやってほしい。	−.032	.115	.113	.825
⑱Aには，難しい仕事を手伝ってほしい。	.094	.028	.372	.781
⑲Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい。	.406	.139	.088	.628
固有値	8.95	1.88	1.21	0.91
寄与率(%)	44.77	9.39	6.07	4.56

い。」，「Aには，何でも話したい。」，「Aには，私の話し相手になってほしい。」，「Aには，うれしいことや楽しいことを，まず報告したい。」，「Aには，私のぐちを聞いてほしい。」から構成されており『相談・コミュニケーション』因子と命名した。

第2因子は「Aには，私のことを考えていてほしい。」，「Aには，私が元気でいるかどうか気にかけてほしい。」，「Aには，私の心の支えでいてほしい。」，「Aには，思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい。」から構成されており『精神的支え』因子と命名した。

第3因子は「Aには，私ができないことを，代わりにやってほしい。」，「Aには，難しい仕事を手伝ってほしい。」，「Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい。」，「Aには，私の身の回りの世話をしてほしい。」，「Aには，難しい仕事をするとき，そばにいてほしい。」から構成されており『道具的支援』因子と命名した。

そして，第4因子は「「Aには，私の知らないことを教えてほしい。」，「Aには，私の間違いや欠点を指摘してほしい。」，「Aには，重要な決心をするときは，意見を聞きたい。」から構成されており『指導・アドバイス』因子と命名した（第4因子までの累積寄与率64.78%）。

00年調査における中学生，高校生，大学生の各発達段階，および，対象を込みにしたデータについて，因子分析（主成分解・バリマックス法）を男女別で，それぞれ実施したところ，男女でほぼ同様の結果を得た。そこで，男女を込みにした同様の因子分析を行った。固有値が1.0以上を1つの目安として，加えて，十分なる説明割合を得ることができ，スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮して4因子が導出された。導出された4因子はそれぞれ以下のとおりである（Table 4）。

第1因子は「Aには，私の悩みを相談したい」，「Aには，何でも話したい」，「Aには，私の話し相手になってほしい」などから構成されており『相談・コミュニケーション』因子と命名し

Table 4：2000年調査における依存欲求尺度の因子分析結果（バリマックス回転）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
⑩Aには，私の悩みを相談したい。	.813	.189	.099	.216
⑮Aには，何でも話したい。	.802	.126	.092	.208
①Aには，私の話相手になってほしい。	.771	.200	.061	.267
⑤Aには，うれしいことや楽しいことを，まず報告したい。	.716	.334	.078	.224
⑦Aには，私のぐちを聞いてほしい。	.700	.198	.253	.068
⑫Aには，喜びや悲しみを，共に感じてほしい。	.582	.461	.118	.255
⑳Aには，悪い知らせや悲しい知らせを受け取るとき，一緒にいてほしい。	.496	.366	.333	.088
⑥Aには，私のことを考えていてほしい。	.258	.783	.142	.178
⑧Aには，私が元気でいるかどうか気にかけてほしい。	.281	.744	.186	.207
⑬Aには，私の心の支えでいてほしい。	.435	.651	.097	.302
②Aには，思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい。	.435	.618	.015	.244
⑪Aには，私のわがままを受け入れてほしい。	.016	.577	.488	−.014
⑰Aには，私ができないことを，代わりにやってほしい。	−.014	.113	.807	.071
⑱Aには，難しい仕事を手伝ってほしい。	.110	−.008	.764	.380
⑲Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい。	.328	.055	.667	.071
⑯Aには，私の身の回りの世話をしてほしい。	.084	.367	.625	−.253
④Aには，難しい仕事をするとき，そばにいてほしい。	.315	.252	.483	.390
⑨Aには，私の知らないことを教えてほしい。	.225	.175	.153	.737
⑭Aには，私の間違いや欠点を指摘してほしい。	.354	.217	.020	.656
③Aには，重要な決心をするときは，意見を聞きたい。	.398	.354	.114	.477
固有値	8.54	2.13	1.23	0.93
寄与率(%)	42.70	10.64	6.13	4.67

た。

第2因子は「Aには，私のことを考えていてほしい」，「Aには，私が元気でいるか気にかけてほしい」，「Aには，私の心の支えでいてほしい」などから構成されており『精神的支え』因子と命名した。

第3因子は「Aには，私ができないことを代わりにやってほしい」，「Aには，難しい仕事を手伝ってほしい」，「Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい」などから構成されており『道具的支援』因子と命名した。

そして，第4因子は「Aには，私の知らないことを教えてほしい」，「Aには，私の間違いや欠点を指摘してほしい」，「Aには，重要な決心をするときは意見を聞きたい」から構成されており『指導・アドバイス』因子と命名した（第4因子までの累積寄与率64.15%）。

98年調査と00年調査における依存欲求の因子構造は，同様のものであった。これは，依存欲求尺度の構成概念妥当性（因子的妥当性）を示すものであると考えられる。

依存欲求尺度の構成概念妥当性を検討するための仮説検証

「依存欲求尺度が妥当性を有するならば，女子の方が男子よりも欲求の強度はより強いだろう」という仮説を検証するために，まず，依存欲求の強度得点として，各調査対象者が4対象について評定した評定値の平均値を算出した。この強度得点に関して，「調査年度」（98年調査か00年調査）×「性別」（男子か女子）の2要因の分散分析を行った。その結果，両要因の主効果が有意であった（順に，$F(1,1355)=4.96$，$p<.05$；$F(1,1355)=132.22$，$p<.001$）。98年調査の方が（$M=3.36$，$SD=0.03$），00年調査よりも（$M=3.29$，$SD=0.02$），また，女子の方が（$M=3.51$，$SD=0.02$），男子よりも（$M=3.13$，$SD=0.02$），有意に依存欲求の強度得点が高かった。なお，交互作用は有意ではなかった。

そこで，調査年度別，学年別で，男女における強度得点の差の検定を行ったところ，Table 5のように，女子の方が，男子よりも依存欲求の強度得点が有意に高かった。よって，仮説は支持されたといえる。

全体考察

以上を総合的に考察すると，本研究で作成した依存欲求尺度は，高い信頼性と十分な妥当性を有する尺度であると判断できる。

今後の課題としては，本研究の調査対象者である青年期以降の年代における尺度の検討が考えられる。本研究では，日常生活に有意味な関連を持つと想定される対象，すなわち，母親，父親，同性の親友，そして，異性の親友の4対象を依存対象としたが，青年期以降の調査対象者の場合，依存の対象をどのように設定するのかについて検討する必要があろう。発達心理学の領域では，母親の心の支えの対象として，子供の存在が指摘され

Table 5：依存欲求の強度の男女比較（調査別，学年別）

調査年	学年	人数（男子:女子）	依存強度平均（*SD*）男子	女子	*t* 値	*df*	*p*
1998年	中学	(56： 84)	3.29(0.57)	3.67(0.63)	3.72	138	***
	高校	(73： 96)	3.03(0.58)	3.57(0.51)	6.39	167	***
	大学	(91： 72)	3.15(0.64)	3.44(0.52)	3.21	161	**
	全体	(220：252)	3.14(0.61)	3.57(0.56)	7.89	470	***
2000年	中学	(118：137)	2.98(0.57)	3.17(0.61)	2.60	253	**
	高校	(154：101)	3.17(0.58)	3.56(0.53)	5.52	253	***
	大学	(119：258)	3.19(0.53)	3.56(0.53)	6.22	375	***
	全体	(391：496)	3.12(0.57)	3.45(0.58)	8.62	885	***

*** : p<.001　**:p<.01

ている（大日向，1988など）。青年期までの依存対象としては，両親，親友，および，恋人などが想定された。これらの対象と対比して，自分の子供は，質的にどのように異なるのか，あるいは，どのように類似するのかについて解明する必要があるだろう。

また，本研究では，ある程度継続する対人関係を説明する概念として，互恵的相互依存関係における依存と支援の双方向のやりとりのうち，個人の依存欲求を測定するための依存欲求尺度の作成を目的としていた。依存欲求と支援欲求との関連については，田中と高木（1994）が，大学生を対象として，同性の友人関係における両欲求の構造，および，個人における両欲求の関連性を，それぞれ以下のように明らかにしている。まず，依存欲求の構造については，男女とも「情緒的，道具的，そして，支持」の3つの機能を友人に期待していた。他方，支援欲求の構造については，男子では，「情緒的，道具的，そして，支持」の3つの機能について友人を支援したいと望んでいた。しかし，女子では，友人の依存欲求が示されたのちにそれを支援したいと解釈できる「受動的支援」と，自ら進んで積極的に支援したいと解釈できる「積極的支援」の2つの次元が加わった形の，「受動・情緒的，積極・情緒的，受動・道具的，積極・道具的，そして，支持」の5つの機能について友人を支援したいと望んでいた。さらに，個人がいだく「依存欲求」と「支援欲求」との関連について正準相関分析をおこなったところ，女子では，たとえば，友人への情緒的依存欲求を強くいだく者は，友人からの情緒的依存欲求を受動的に充足させたいというように，自分が友人に求める依存の機能と，同じ機能の充足を友人にも提供したいと望んでいたのである。しかし，男子では，たとえば，友人への情緒的依存欲求を強くいだく者は，友人からの情緒的依存欲求を充足させ，かつ，友人からの支持欲求をも充足させたいと望んでいた。つまり，男女で，その対応関係は異なっていた。しかし，田中と高木の研究で用いられた依存欲求尺度は，本研究で作成した依存欲求尺度の「指導・アドバイス」や「道具的支援」に相当する項目が含まれていないこと。また，その依存欲求尺度の「～してほしい」という表現を「～してあげたい」という表現に改めた支援欲求尺度を用いていることなどから，本研究で作成された依存欲求尺度，および，信頼性と妥当性が確認された支援欲求尺度を用いた結果の再検討が必要と考えられる。そのためにも，「他者への道具的な支援，あるいは，精神的な支援を提供することを望む欲求」として定義される支援欲求を測定する尺度を作成することが必要となる。そして，依存欲求と支援欲求の両欲求から，互恵的対人関係を説明することの可能性を探ることが課題となるだろう。

文献

相川　充　1987　被援助者の行動と援助　中村陽吉・高木　修（編）他者を助ける行動の心理学　光生館　p.136－145.

Antonucci, T. C. & Jackson, J. S. 1990 The role of reciprocity in social support. In B. R. Sarason, I. G. Sarason & G. R. Pierce (Eds.), *Social Support : An interaction view*. New York : John Wiley & Sons. pp.173－198.

Cohler, B. J. & Geyer, S. 1982 Psychological autonomy and interdependence within the family In. F. Walsh (Ed.), *Normal Family Processes*. New York : Guilford. 196－228.

Gurian, J. P. 1984 Dependency In J. Gould & W. B. Kolb (Eds.) *A Dictionary of Social Sciences*. New York : Free Press. 189－190.

福岡欣治　1997　友人関係におけるソーシャル・サポートの入手と提供―認知レベルと実行レベルの両側面からみた互恵性とその男女差について―対人行動学研究，15，1－12.

福岡欣治　1999　友人関係におけるソーシャル・サポートの入手―提供の互恵性と感情状態　静岡県立大学短期大学部研究紀要，13－1，57－70.

飯田亜紀　2000　高齢者の心理的適応を支えるソーシャル・サポートの質：サポーターの種類

とサポート交換の主観的互恵性 健康心理学研究，13－2，29－40.
ジョンソン F. A. 江口重幸・五木田 紳（訳） 1997 「甘え」と依存―精神分析的・人類学的研究―弘文堂
（Johnson. F. A. 1993 *Dependency and Japanese socialization Psychoanalytic and anthropological investigation into AMAE*. New York University Press.）
周 玉慧・深田博己 1996 ソーシャル・サポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響 心理学研究，67－1，33－41.
加藤義明 1982 FDスケールの検討 東京都立大学人文学報，152，77－90.
西川正之 1997 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究，13，13－22.
大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
関知恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究―自己像との関連において―京都大学教育学部臨床心理事例研究，9，230－249.
嶋 信宏 1991 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究，39－4，440－447.
高橋惠子 1968 依存性の発達的研究：I 大学生女子の依存性 教育心理学研究，16－1，7－16.
高橋惠子 1990 愛情のネットワーク 高橋惠子・波多野誼余夫（著） 生涯発達の心理学 岩波新書 p. 69－88.
高木 修 1987 順社会的行動の分類 関西大学社会学部紀要，18－2，67－114.
田中 優・高木 修 1994 被依存者の心理についての研究（I）―依存欲求と被依存欲求との関連性について― 日本教育心理学会第36回総会発表論文集，322
田中 優・高木 修 1997 中学生における社会的依存要求の特徴について 社会心理学研究，12-3，151－162.
辻 正三 1969 「依存性テスト」の検討 東京都立大学人文学報，77，17－33.

謝辞

本研究を進める上で，高木修先生（関西大学）よりご指導を頂きました。また，調査の実施にあたり，蓮花一己先生（帝塚山大学），西脇正恵さん（帝塚山大学），牛田聡子先生（成安造形短期大学），吉川聡一先生（帝塚山大学），大坂秀樹先生（岡山県立玉野光南高等学校）より多大なご協力をいただきました。これらの先生方，また，調査にご協力いただきました調査対象者の皆様に感謝いたします。

付録１：依存欲求尺度の候補項目（80項目）

依存の機能	No.	項目内容
心の支え	1	Aには，私がつらいときや悲しいときに，まず頭に浮かぶ存在でいてほしい
	2	Aには，私にとって，思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい。
	3	Aには，一緒にいることでなんとなく安心できる存在でいてほしい。
	4	Aには，私の心の支えでいてほしい。
	5	Aには，私にとって，思い浮かべることで，元気が出る存在でいてほしい。
	6	Aには，私にとって，心がいっぱいになる存在でいてほしい。
関心	7	Aには，私が何かするとき，気にかけてほしい。
	8	Aには，私の様子や態度を気にかけてほしい。
	9	Aには，私のことを考えていてほしい。
	10	Aには，私が元気でいるかどうか気にかけてほしい。
	11	Aには，私を見守っていてほしい。
	12	Aには，私の身の回りのことに関心を持っていてほしい。
受容	13	Aには，いざというときは，無理な頼みごとをきいてほしい。
	14	Aには，私の申し出を受け入れてほしい。
	15	Aには，少々無理を受け入れてほしい。
	16	Aには，私を受け入れてほしい。
	17	Aには，甘えたい。
	18	Aには，イライラしているとき，当たり散らしたい。
	19	Aには，私のわがままを受け入れてほしい。
支持	20	Aには，どんなことがあっても，私を見捨てないでほしい。
	21	Aには，何かにつけて，私のみかたになってほしい。
	22	Aには，不安なとき，「そうだ」といって自信を持たせてほしい。
	23	Aには，私の意見に賛成してほしい。
	24	Aには，私を好きでいてほしい。
同情・共感	25	Aには，うれしいことや楽しいことを，まず報告したい。
	26	Aには，私が病気のときやゆううつなとき，同情してほしい。
	27	Aには，私が困っているときや，悲しいとき，気持ちをわかってほしい
	28	Aには，私の成功を共に喜んでほしい。
	29	Aには，喜びや悲しみを，共に感じてほしい。
信頼・理解	30	Aには，私を全面的に信用してほしい。
	31	Aには，私を誰よりも信頼してほしい。
	32	Aには，私の考えていることは，正しいと信じてほしい。
	33	Aには，私がどんなことをしようと理解してほしい。
	34	Aには，私が不利な立場にあるときでも，私のことを信じてほしい。
	35	Aには，私の考えていることを，わかっていてほしい。
励まし	36	Aには，私が何かするときに，励ましてほしい。
	37	Aには，私が落ち込んでいるとき，なぐさめてほしい。
	38	Aには，私のしたことをほめてほしい。
Being（ともにいることを望む）	39	Aには，留守番をするとき，一緒にいてほしい。
	40	Aには，いつも私と一緒にいてほしい。
	41	Aには，悪い知らせや悲しい知らせを受け取るとき，一緒にいてほしい。
	42	Aには，一緒に遊んだり外出したりしてほしい。
	43	Aには，難しい仕事をするとき，そばにいてほしい。
	44	Aには，いつも私のそばにいてほしい。
相談	45	Aには，私が困っているときは，相談したい。
	46	Aには，私の話し相手になってほしい。
	47	Aには，私のぐちを聞いてほしい。
	48	Aには，私のことを相談したい。
	49	Aには，私の悩みを相談したい。
	50	Aには，何でも話したい。
助力	51	Aには，私の身の回りの世話をしてほしい。
	52	Aには，さがしものをするとき，手伝ってほしい。
	53	Aには，私ができないことを，代わりにやってほしい。
	54	Aには，難しい仕事をするとき，手伝ってほしい。
	55	Aには，どうしようもないとき，助けてほしい。
	56	Aには，気軽に物を貸してほしい。
（寄付・奉仕）	57	Aには，私に奉仕してほしい。
	58	Aには，小銭を貸してほしい。
（分与・貸与）	59	Aには，私が必要とするとき，時間をさいて助けてほしい。
	60	Aには，私が必要とするとき，お金を貸してほしい。
	61	Aには，私が必要とするとき，お金を与えてほしい。
	62	Aには，経済的に困ったとき，助けてほしい。
	63	Aには，私が必要とするとき，物を貸してほしい。
	64	Aには，私が必要とするとき，お金や物を援助してほしい。
（緊急事態の救助）	65	Aには，私が病気のとき看病してほしい。
	66	Aには，私が旅先で災難にあったら，助けにきてほしい。
	67	Aには，私が事故にあったら，助けにきてほしい。
（労力を必要とする援助）	68	Aには，一人ではできない，力仕事を手伝ってほしい。
	69	Aには，体力を使う仕事を手伝ってほしい。
（小さな親切援助）	70	Aには，困っているとき，ちょっとした用事を手伝ってほしい。
指導・情報提供	71	Aには，難しい仕事をするとき，やり方を教えてほしい。
	72	Aには，私に指示を与えてほしい。
	73	Aには，ひとりで決心できないとき，アドバイスしてほしい。
	74	Aには，重要な決心をするときは，意見を聞きたい。
	75	Aには，迷っているときは，「これでいいですか」と聞きたい。
	76	Aには，私を指導してほしい。
	77	Aには，私の間違いや欠点を指摘してほしい。
	78	Aには，私の知らないことを，教えてほしい。
自己開示	79	Aには，本音で話したい。
	80	Aには，喜怒哀楽を隠さずあらわしたい。